

主イエスと子どもたち

マルコの福音書 10章13節～16節

はじめに

今日は「子ども祝福式」の礼拝です。今朝は、「イエス様と子どもたち」から学びましょう。

歴史上もっとも優れた教育者はだれでしょう。それはイエス・キリストです。イエス・キリストほど大きな影響を人々に与えた人はいません。

さて、イエス・キリストは子どもをどのように見、どのように扱えと教えられたのでしょうか。

I. 主イエスと子ども

1. イエスは、子どもをどのように見ておられるか。

(1) 神の国に入れる者（マタイ 19:14）

あるとき、「イエスに触れていただこうと、人々が子どもたちを連れてきた」のです（13）。マタイの福音書によると、この「触れていただこうと」とは、「イエスに手を置いて祈って頂くため」だったことが分かります。日本では11月15日に「七五三の祝い」をする習慣があります。男の子は3歳と5歳の時、女の子は3歳と7歳の時に着飾ってお祝いをします。イエス様の時代にも、親は子どものことを思い、イエス様に祝福して頂きたいと連れて来たのです。

すると弟子たちは、子どもを連れて来た親たちを叱りました。それは、「うるさい」と、「子どもには神様の祝福を受ける資格はまだない」と思っていたからです。ですから、お忙しいイエス様の邪魔をしないでほしいと思ったのでしょうか。

それを見てイエス様は、憤って弟子たちに。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです」とお答えになりました。

イエス様は、「神の国はこのような者たちのもの」と言われ、さらに、さらに、弟子たちには「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません」と言われたのです。

(2) 神を知り、神を讃美できる者（マタイ 21:15）

あるとき、祭司長、律法学者は、子どもたちがイエスを讃美するのに腹を立て、イエス様に「子どもたちが何と言っているか聞いていますか」と抗議しました（マタイ 21:15）。するとイエス様は「『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』あるのをあなたがたは読んだことがないのですか」と言って、子どもたちを擁護なさいました。イエス様は、子どもたちが、神様を知ることが出来ること、神様を賛美することが出来ることをはっきりと知っておられました。

2. イエスは、子どもをどう扱えと言われたか。

(1) 子どもを受け入れなさい（マタイ 18:5）。

子どもを子どもとして、ありのままに受け入れなさいと言うことです。早急な判断、批判、非難、脅し、命令、要求、お説教、尋問などは、子どもに「受け入れられていない」という思いを抱かせます。受け入れられていると思わせるには、「干渉を控えること」、「話を聞いてあげること」、「理解を示すこと」ことが大切です。

(2) 子どもにつまずきを与えてはいけない (マタイ 18:6)。

子どもたちは親や教師の価値観（生き方）に影響されます。特に今の子どもたちに「つまずき」となるものを考えてみましょう。

「可愛い子どもを求める」。

親や教師は、姿や形の可愛い子どもを求めます。無意識のうちに子どもに「美人礼賛」の価値観を植えつけてしまいます。それは、逆に劣等感を植えつけることにもなりやすいのです。人間の価値が身体の姿や形に左右される考えを生みます。そうして、障害や欠陥を持つ者を見下げたり、いじめたりする子を育てることになるのです。

「頭のいい子どもを求める」。

これは「能力礼賛」の価値観を植えることになります。それは、逆に「出来ない」ことへの劣等感を生みます。出来る子は、出来ない子を見下げる。理解や能力の発展には、種類も速度も違うことを認めることが大切です。

(3) 子どもを見下げてはいけない (マタイ 18:10)。

これは、「子どもを受け入れ」、「子どもにつまずきを与えない」ことから、当然引き出されるものです。子どもだからといってばかにすることなく、子どもからも教えられる姿勢を持ちましょう。

(4) 邪魔をしないで、わたしのところに来させなさい (マタイ 19:14)。

子どもを自分で独占しない。子どもは、「神からお預かりしたものの」。だから、神に育てていただくことが大切。子どもは神を知りたがっています。「邪魔をしないように」。むしろ、子どもに「神を知るチャンス」を与えましょう。聖書を読んであげましょう。教会に行かせましょう。

3. イエスは、子どもをどう扱われたか

(1) 子どもの声に耳を傾けられた (マタイ 21:16)。

主イエスには、子どもが神を讚美していることが分かったのです。それは、子どもたちのことばをよく聞かれたからです。子どもの話や訴えを聞く。頭からばかにしたり、ことばをさえぎったりしない。さらに、理解を示す。親が理解したことを伝える。子どもの言っていることを理解したことを相手に確認させる。また、それを聞いた自分の気持ちを伝える。

(2) 子どもを抱き、手を置いて祝福された (マルコ 10:16)。

子どもには、スキンシップが必要です。「抱く」、「手を置く」などによって主イエスは子どもに分かるように祝福なさいました。

Ⅱ. 教会による教育

教会による子ども教育は、おもに「礼拝」と「分級」に分けられて行われています。

1. 教会の中心である礼拝

子どもの参加する教会の礼拝は、「CS礼拝」と「大人の礼拝」というのが現状でしょう。CS礼拝は、歴史的には古くありません。18世紀に日曜学校が起こったときからといわれています。それまでは、礼拝といえば、大人も子どもも一緒でした。

この教会でも以前は、はじめに「子ども礼拝」があり、終わると子どもたちは階下に行き、「大人の礼拝」の間は遊んでいました。しかし、今は子どもたちは「礼拝」に参加しています。ではなぜでしょう。

(1) 礼拝は教会が行うものである。

教会の礼拝は、教会学校の教師だけでは、十分ではありません。

(2) 礼拝の中心は、みことばと聖礼典であること。

礼拝に欠かせないのは何でしょう。それは「みことばと聖礼典」です。賛美も、祈りも必要です。しかし、「みことばと聖礼典」がなければ、真の礼拝とは言えません。

以上のことを考えると、CS礼拝は、礼拝として十分ではないのではないのです。

2. 親と子どもが一緒にする礼拝

これは「大人の礼拝」に子どもが参加するものではありません。「大人の礼拝」、「子どもの礼拝」という区別をしない「教会の礼拝」です。教会とは、大人と子どもの区別のないものです。幼児からお年寄りまでの全体が教会です。ですから、教会の礼拝は、「全員の礼拝」である。こういう考え方です。

日本長老教会礼拝指針3-4は、次のように教えています。「家族一同が神の家で共に礼拝することが重要である。そのために子どもたちも親とともに礼拝に列席する」

これを「子どもと信仰」の点から見てみますと、

- (1) 親の礼拝する姿を見る。
 - (2) 招詞から祝祷までのきちんとした礼拝にあずかれる。
 - (3) 聖礼典を見ることが出来る。
 - (4) 牧師の説教を聞ける。
- などの勝れた点を見ることが出来ます。

「子どもは分からないのではないか」という疑問がでます。分かるというのは、頭でとは限りません。からだで分かることもあります。頭で分かっても身につかないことがあります。子どもは、礼拝において、分からなくても神の臨在を身で覚えるのです。

「最近私は、以前にもまして、子どもを会衆から区別することは間違いである、と思うようになりました。私は子どものための特別集会は良い試みであると思っています。しかし、礼拝はやはり彼らと一緒に守りたいのです。もしも説教が子どもに分からないのなら、それは説教に当然含まれていなければならないものが、その説教から抜け落ちてしまっているからではないでしょうか。私は礼拝に、若い人や老人ばかりでなく、あらゆる年代の人が、そろって集まって来ることを願うものです」(ス波尔ジョン)

教会の礼拝のあり方は、子どもの信仰と深く関わっていると思われま

す。

3. 中村家の場合

1965年に自宅で開拓伝道を始めました。日曜日には、全部の部屋が教会の活動に使われるという、家庭環境としては、決して良いものではありませんでした。それは菊名に会堂が建つまでの約15年、一番下の子が小学校5年になるまで続きました。

子どもは5人いますが、長老、HBA、スタッフ、牧師夫人、牧師と、みなが主イエス様に仕える者になっていることは感謝です。

子どもたちは、みなスポーツ好きで、男の子は野球。女の子はバトミントンをしました。野球は、町の少年野球で川崎市でも最強のチームでしたので、日曜日が戦いでした。次男は中学時代テニスをやり、川崎市で優勝しました。日曜日の試合や練習で学校と対立したこともあります。高校に入ってから、礼拝が守れるようにスポーツでない部活を選んだようです。信哉牧師も小学校時代に野球をしました。足を痛めてやめました。

牧師の家庭は、日曜祭日がないため、子どもたちと一緒に出かける機会が少なかったため、決して十分なコミュニケーションができていたとも思えません。開拓伝道の15年間、私は英語を教えて家計を支ましたので、経済的にも厳しい所を通って来ましたが、4人とも神様に仕えていることは、ただあわれみとしか言いようがありません。

家庭礼拝も、毎日行ったわけでもありません。

ただ、私たち夫婦は、子どもの前では、不平不満を言わず、教会員を批判せず、喜んで主に仕えて来ました。子どもたちには、クリスチャン生活や牧師の生活が理想と思えたのでしょう。今、その厳しさを味わっているのかもしれない。

「牧師にだけはなりたくない」という牧師の息子がいたり、「牧師とだけは結婚したくない」という牧師の娘がいます。でも、うちの子たちは違いました。ただただ感謝です。

終わりに

今朝もう一度、イエス様の子どもたちへの態度から学び、子どもたちをイエス様に導く家庭、教会になろうではありませんか。